9 長者の山

玉川地域で金山開発を手掛けたのは、陸奥の豪族安倍頼良（後に頼時と改名）である（年代は不詳というが、「前九年の役」が起こった永承六年以前のことと思われる）。金山探索の一行は、南部領の葛根田から、旧三月の堅雪を渡って背梁山脈を越え、ひそかに出羽領の小和瀬に入り込み、やがて「八尺の沢」で金を発見した。

開発が続いた二年後のある夜、二人組の盗賊に襲われ、リーダーの石黒直久が殺された。このため、付近の高台に築かれたのが「長者館」で、遺構の一部は今も残っている。その後開発された金山は「川崎の六〇目の沢」（金が目産六〇匁出た所）、ダラメ金（粒状のものか）が出た「ダラメ沢」、殺された石黒氏にちなんだ「石黒森、石黒沢」それに初めて金を発見した「八尺の沢」などで、その地名は今も残っているといわれ、また当時の坑道跡らしいものも残っているという。